

ロビン・フッドの死

1

「何も飲まんし 何も食わん」とロビン・フッド
「肉など食つても良くはならん

陽気なカークリーの修道院で

この身体から血を抜かぬことにはな」

2

「それはなりませぬ」とウイル・スカーレット
「お頭 どうぞお聞きください

あなた様の素晴らしい五十人の射手も連れず
お一人で行かれるなどとは

3

「そこに控えたる屈強のヨーマンは
きつとあなた様とひと悶着起こしましよう
もし我らを必要と思し召すならば
我らはいつもあなた様の意のままでござる」

4

「ウイリアム・スカーレットよ たわけたことを
おまえはここに居るがいい」
「お頭 そのようにご立腹なされでは
もはやこの願い お聞きいれござらぬか」

5

「このわしと共に行くのは
このわしと馬を並べるのは
このわしの弓を担ぐのは
リトル・ジョンをおいて他にない」

6

「ご自分で担がれませ あなた様がご自分で
道中二人で腕だめしなどいかがです」
「そうしよう」とロビン・フッドは言いました

「行くぞジョン 万事なるようになるわ」

7

こうして勇敢な男たちは出かけてゆきました
日がな一日馬を並べ
黒い川までやつてみると
板が一枚渡してありました

8 板の上には老婆が一人座っていました

老婆はロビンに呪いの言葉をはきました
「なぜそのようにこのロビン・フッドを呪う」

・・・・・

「ロビン・フッド様をお助けするため
そのお身体を思って涙を流しております
今日そのお身体から血が流れましょう」

「あの女修道院長はわしの従姉妹にあたる者
わしの近しい親族だ
その女がわしに害をなすはずもない
誓つてそのようなことはありえない」

こうして二人は馬を進めました
一度も立ち止まることなしに
カークリーの修道院までやつてくると
中へと入つてゆきました

カークリーの修道院へやつてくると
二人は門を叩きました

女修道院長が立ち上がり

快男児ロビンを中へ迎え入れました

ロビンは女修道院長に

金貨を二十ポンド渡しました

「好きなだけ使うがいい
足りなければいくらでもやろう」

女修道院長が

ロビンの部屋に降りてきました
両の手には

絹に包んだ瀉血針を持っていました

「もみ殻を入れる大皿を火にかけてください
そして腕をまくってください」と女修道院長
ああ ロビンはなんとうかつな男

忠告に耳を貸さなかつたばかりに

女修道院長は瀉血針をロビンの血管に当てました
ああ かえすがえすも哀れかな

そうして刃針^{はばり}を突き立てました
腕から真っ赤な血がほとばしりました

はじめに濃い血が流れでて

ついには薄い血になりました

ここにきてロビンはやっと

女の悪意に気がつきました

17 「どうなされたそのお顔色」とリトル・ジョン

「ジョンよ 一杯くわされた

・ · · · · ·

18 「わしの緑の上衣^{うわぎ}は

膝のところで切られたが
この手に持ったこの剣が

お礼におまえの命をいただこう」

19 しかし窓から

ロビンがすべり降りようとしたその時に
レッド・ロジャーのよく研がれた剣が
ロビンの白い脇腹を貫きました

20 ロビンもさつと身構えて

相手の勢いを巧みにかわし
レッド・ロジャーの頭と両肩の真ん中に
ひどい傷を負わせたのでした

21

「いつまでもそこに倒れておれ

犬がその骸^ほを食うように
こちらも聖別の淨めを受けるとするか
行つてお願ひするにしよう」

22

「さあ お迎えだ」ロビンはジョンに言いました
「お前のその手で送つてくれ
天国におわす神にかけて
きっとキリスト様がお救いくださるだろう」

23

24 「お頭^{かしら} お許可^{ゆきか}を

お頭かしら どうかお許ゆき可こを

この館やかた に火ひを放はなち

カークリーの修道院しゅうどういんを焼き払はなうことを

「いや それは相成らん」とロビン・フッド

「それはあってはならんこと
最期さいごに女めに手てをかけたとあっては
神かみに顔ほ向けできはすまい

26 「わしをお前の背せに負うつて

むこうの通りまで連れてゆき

小石こいしと砂さとで

美しい墓はかを作つってくれ

「頭かしらのところにはわしの輝てるく剣つるぎを立て

足あし下もとにはわしの矢やを立てて

脇わきにはイチイの弓ゆみを横よたえて

さお尺さおしゃくを・・・・・

27

(宮原牧子訳)